

JAF AE Newsletter



No. 16 (January 2005)

第 16 回全国大会 / 宮崎産業経営大学にて開催

プログラム

日時：2004年12月4日(土)

大会総合司会：津田早苗(東海学園大学)

10:00 開会の辞：徳地慎二(宮崎産業経営大学)

会長挨拶：本名信行(青山学院大学)

10:10 - 11:40 特別講演：

Dr. Erich Berendt (清泉女子大学)

“ Learning East and West: A Comparison of Conceptual Patterns and Altering Attitudes ”

11:40 - 12:00 会員総会

12:00 - 13:30 昼食休憩

13:30 - 15:40 研究発表

司会：吉川寛(中京大学)

1. “ When Worlds Collide: Writing Instruction in Singapore ” Renu Gupta (会津大学)

2. “ Post-war Korean and Japanese English Vocabulary: A Bridge over Troubled Waters? ” Judy Yoneoka (熊本学園大学)

3. 「英語変種間相互理解不全問題の実態 ニホン英語の身体部位メタファー表現の理解度と受容度調査より」三宅ひろ子(青山学院大学)

4. 「韓国英語教育の現状」梁裕民(宮崎大学)

5. 「OKAKURA Tenshin の *The Book of Tea* におけるレトリックに関する一考察」

岡裏佳幸(福岡工業大学)

15:45 - 16:00 休憩

16:00 - 17:40 シンポジウム

テーマ：「英語のできる日本人を生み出すために今必要なこと：中国，韓国，タイの英語教育からの提言と日本の小学校英語教育への提言」

司会：徳地慎二(宮崎産業経営大学)

発題者：

「中国，韓国の英語教育の現状から日本が学ぶこと」
本名信行(青山学院大学)

「タイの英語教育の現状から日本が学ぶこと」

竹下裕子(東洋英和女学院大学)

「小学校の英語活動に期待するもの」

影浦攻(宮崎大学)

閉会の辞：末延岑生(兵庫県立大学)

懇親会(宮崎観光ホテル)

JAF AE 海を渡る

末延岑生(兵庫県立大学)

宮崎産業経営大学での第 16 回全国大会は、本州からはじめて海を渡った。今回はレトリック特集と言っていい。メタファーやアイロニーということばが会場に飛んだ。

E. Berendt 氏による特別講演 “ Learning East and West: A Comparison of Conceptual Patterns and Altering Attitudes ” では、ご自分の講演を local train にたとえるなど、数々のレトリックを使っただけでなく、同じ文化の中でも考えや感じ方をピタッと共有することは難しいが、氏はそれを tentative と謙遜しながらも数値で表したのである。多文化の中にあって、東西文化の正しい紹介者の一人だ。

研究発表は、R. Gupta 氏の “ When Worlds Collide ” から始まった。シンガポールの大学での一貫した英語教育哲学の必要性を論じたが、日本とよく似ていると思った。

J. Yoneoka 氏の “ Post-war Korean and Japanese English Vocabulary ” では、西洋人の視点から日韓英語を探り、Bansoko, lotte, skinship など、日本語や和製英語が頻発する Konglish の実態を分類した。楽しく会場を沸かせてくれた。

三宅ひろ子氏の「英語変種間相互理解不全問題の実態」は、ニホン英語の身体部位のメタファー表現の理解度と受容度を千名を対象に調査。受容度までも調べたものはあまりない。使ってみたいニホン英語的表現は 51% もあった。いつか TOEIC や TOEFL に出る表現

となるかもしれない。

梁裕民氏の「韓国英語教育の現状」では、もっとも深刻な問題として教員の質の問題が取り上げられた。これも日本とよく似ている。

岡裏佳幸氏の「岡倉天心の *The Book of Tea* におけるレトリックに関する一考察」では、背景調査と数多くの文例が示されたが、時間的には大きすぎる課題であった。

最後にシンポジウム「英語のできる日本人を生み出すために今必要なこと」があった。中国・韓国の現状を本名信行会長によると、二ホン英語と比べて China English は自己主張的で、ヨーロッパ的 identity を借りることなく、面子を重んじる、発信型英語であるという。“My face is bigger than yours.” “We speak English, but sound Chinese.” など堂々と使っている。日本の試験なら全部バツになるだろう。思うに中国が英語教育から英文学と英文法を徹底的に洗い落としたあの英断は、おぞましい文化大革命の唯一の“メリット”ではなからうか。韓国では 1996 年の大改革以降、小 3 から英語が学ばれ、中高では第二外国語も学ぶという。

次にタイの現状を竹下裕子氏が発題、小 1 から英語を始め、発信型で、Mr. (first name) などと呼びあうという。パワーポイントの提示はプロ級だった。

さらに前文部省調査官の影浦攻氏が「小学校の英語活動に期待するもの」を発題、「アジア英語」に対する理解を示された。しかし、21 世紀に入っても、文部科学省やNHKは いまだに“正しい英語を”とか“英語らしくしゃべってみよう”などと英米崇拜の表現をしつこく使ってこれを英語教育の目標にしているが、氏を通じてこうした植民地的で他文化までも強要する無駄な発想を一時も早く是正するようお願いしたい。世界でも稀なこんな“亡霊表現”がさまよう限り、児童英語だけでなく日本の英語教育は路頭に迷い続けるだろう。

最後に、何とかの遠吠えに聞こえるかもしれないが、「アジア英語」というのは新しい考え方である。新しい、進んだ考えというのは、日ごろ勉強不足の人たちにとってはなかなかついてこられないものだ。ガラス球ばかり見ている者は本物との区別がつかない。発表の中で交わされた数多くの真剣な質疑応答の中で、こうした「アジア英語」の真髄を、宮崎の若い先生方が驚くほどすんなりと受け入れておられたことに、深い感動を覚えた。実行委員長の徳地先生をはじめ多くの九州の先生方に深く感謝する。

～ 6 月 25 日(土)には神戸(兵庫県立大学)での

再会を楽しみにしています。～

特別講演 REVIEW



Dr. Erich Berendt (清泉女子大学)

Learning East and West: A Comparison of Conceptual Patterns and Altering Attitudes 橋内武 (桃山学院大学)

カナダ出身の Erich Berendt 教授 (清泉女子大学) による特別講演 “Learning East and West: A Comparison of Conceptual Patterns and Altering Attitudes” は、主に認知言語学におけるメタファー論 (Lakoff and Johnson, 1980) を用いて、日英両語における「学習」の捉え方を比較分析したものである。

日英両語のアイディア・メタファーを比べてみると、次のような類似点と相違点が認められる。「アイディアは食品である」という喩えは、形式と意味の両方で 5 割程度重なり合っている。例えば、英語では swallow という動詞を用い、日本語で「丸飲みする」と言う。だが、形式上 “His ideas are cooked up.” (ヤツのアイディアはでっち上げだ) と「難問を料理する」とでは、形式上類似していても、意味が全く異なる。「議論は戦いである」という喩えは、日英間で形式上ほとんど類似性がなく、意味上も形式上も 56% 相違していると言える。それとは反対に、「アイディアは絵である」という点は、日英語の間で形式と意味の上で 95% の一致を見る。

学習メタファーについてはどうか。両言語である程度共通するのは、「学習は存在物である」、「学習は道である」、「学習は行動である」という比喩である。英語

では、「学習は身体的統制である」、「学習は生き物である」という表現型があるが、日本語には認められない。他方、英語に近く、日本語に認められる表現型に「学習は撮取である」、「学習は植物を生長させることである」、「学習は雛を育てることだ」というものがある。

その他に、日英両語の3つのレジスター（学術論文とエッセイと会話）における学習メタファーを比較して、様々な類似点と相違点を指摘した。

最後に、ベレント教授は東アジアにおいて英語の話し手、書き手には、どのような役割モデルが考えられるかと問いかけた。シンガポールには Catherine Lim らの作家がいる。では、日本ではどうだろうと言うのである。「役割モデルがあってこそ、人々の意識を変え、社会を進展させることができるだろう」という点を強調して、この刺激的な講演を結んだ。

シンポジウム REVIEW

「英語のできる日本人を生み出すために今必要なこと：中国、韓国、タイの英語教育からの提言と日本の小学校英語教育への提言」

徳地慎二（宮崎産業経営大学）

近年、経済、社会の様々な面でグローバル化が急速に進展し、人の流れ、物の流れのみならず、情報、資本などの国境を越えた移動が活発となり、国際的な相互依存関係が深まってきている。このような流れの中で英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠な状況にある。



このような社会情勢を受けて平成14年に、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」が作成され、この戦略構想を基に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」がまとめられた。これは、今後5カ年で「英語が使える日本人」を育成する体制を確立すべく、平成20年度を目指した英語教育の改善の目標や方向性を明らかにし、その実現のために国として取り組むべき施策を具体的な行動計画としてまとめたも

のである。

そこで第16回日本「アジア英語」学会全国大会のシンポジウムとして「英語の出来る日本人を生み出すために今必要なこと：中国、韓国、タイの英語教育からの提言と日本の小学校英語教育への提言」を企画した。発題者として中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会の委員である本名信行教授（青山学院大学）、影浦攻教授（宮崎大学）と「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」研究班の一員である竹下裕子教授（東洋英和女学院大学）の3人をお招きした。



当日はまず本名信行教授に韓国、中国の英語教育の現状につ

いてお話しをいただいた後に、竹下裕子教授にタイの英語教育の現状についてお話をいただいた。そして最後に影浦攻教授に日本の小学校英語教育の現状についてお話しをいただいた。

紙面の都合上、詳細は割愛させていただくが、韓国、中国、タイといったアジア諸国の英語教育の現状や日本の小学校英語教育の現状をお聞きして日本の英語教育の将来に不安を感じたのは私だけではないと思う。各学年での学習時間数、習得すべき語彙数、各学年で達成すべき内容などの点で日本の英語教育は様々な問題を抱えているように感じた。

我々が自分の欠点を的確に判断し今の自分に何が必要なのかを考えると、自分の視点にだけ立ってはその達成は困難である。しかしこのような分析を行う際に、他者との比較対照という視点は極めて有効な手段となる。今回のように他国の英語教育の現状との比較対照といった視点を持つことによって我々は日本の英語教育に何が足りないかを判断することができるはずである。

当日はあいにくの雨模様であったにもかかわらず宮崎県下の小・中・高校の先生方や大学の教員、また宮崎県教育委員会の方々まで約70名近くの参加を頂戴した。深く感謝申し上げます。今回のシンポジウムを契機に宮崎での英語教育の「新しい波」を作り上げていきたいと感じた次第である。

新会員の学会感想

同じ悩みを持っている隣の国で

梁裕民（宮崎大学）

日本に交換留学生として来て間もなく指導の先生のすすめで参加することになった今回の大会は私にとって大切な経験になりました。

大雨の中、たくさんの方が参加してくださいました。ここ宮崎の方も、遠くから来られた方も、そして私のように外国からの方もいらっしゃいました。

かなり緊張していましたがたくさんの方々のおかげで無事に終わりました。私の準備不足にもかかわらず、韓国の英語教育に関心を持ってくださり、色々質問して下さって、とてもうれしかったです。他の方々の立派な発表やシンポジウムを聞きながら、同じ目的を持って、各自の努力を重ねて発展していくアジアを発見しました。特に英語学習にとって同じ環境の中で、同じ悩みを持っている二つの国、韓国と日本があることを知りました。

今回の大会に初めて参加してまたこんな機会があったら、韓国の英語教育についてもっと日本の皆さんにお知らせしたいと思いました。

India Calling ...

Renu Gupta, Aizu University

The voice at the other end of the line says, "This is Marie speaking. How may I help you?" Although Marie speaks with an American (or British) accent, most people today know or suspect that Marie is an Indian who lives in India and has probably never stepped out of her country.

When the Indian economy was liberalized in 1993, Indian businessmen found that they could market one commodity - a skilled workforce that knew English because the language has been taught and studied in India for 150 years. However, everyone soon realized that Indian English is very different from the English spoken in countries such as the US and the UK. From the 1960s until 1993, India was a closed economy; there were few contacts with foreigners and, as a result, a distinct variety of English developed that Indians use to communicate with one another. This variety has its own syntax and pronunciation - often incomprehensible to non-Indians.

Clearly, if Indians were going to handle international calls, they had to be trained to speak in the accent of a different country. The problem is that Indians are used to speaking English with an Indian accent. Changing one's accent is difficult but it also involves other issues - group membership ("Don't put on an accent!") and one's identity as an English-speaker ("I speak English fluently and all my friends understand me!").

To tackle this problem, training centers use a simple technique. For the job, trainees are asked to choose a foreign name and invent a personality. So, Lalita from a small town in Uttar Pradesh chooses to become Lola who lives in an apartment in Peoria with her pet Labrador. When Lalita comes to work at the call center, she slips into a different identity - and the different accent that goes with it; as she steps out of the call center, she reverts to chatting with her friends in Hindi - and English in an Indian accent. Both accents co-exist - one for work and the other for the community.

タイ王国へのいざない

竹下裕子（東洋英和女学院大学）

"The city of angels, the great city, the residence of the Emerald Buddha, the impregnable city (of Ayutthaya) of God Indra, the grand capital of the world endowed with nine precious gems, the happy city, abounding in an enormous Royal Palace that resembles the heavenly abode where reigns the reincarnated god, a city given by Indra and built by Vishnukarn"

天使の偉大なる都、帝釈天の戦争なき平和な、偉大な輝かしき大地、九種の宝石の如く心楽しき王の都、多くの王宮に富み、神が化身となり（国王が）すみたまう、帝釈天が建築の神、ヴィシュカルマに命じて造りたまった神聖なる住処

タイ王国の首都バンコクの正式名称の英語訳 日本語訳 である。もちろん、タイ語でも同様に長い。そこでタイ人は便宜上、冒頭の「天使の都」を意味するクルンテープを首都名の愛称としている。Bangkok はタイ語においては首都バンコクを表さない。

日本の約 1.4 倍の国土に、日本の約半数の人口を抱えるタイ王国。国王をこよなく敬愛し、仏教と前世から受け継ぐ宿命を信じ、心穏やかにゆったりと、チャオプラヤー川の流れると豊かに米を实らせる時間の流れに身を任せて生きる人々...いや、ムエタイ（キックボクシング）

グ)や闘鶏に髪振り乱し、98年度のマイナス10.8%もの実質経済成長率から立ち直る強さとしたたかさも持ち合わせる人々...何とも表現しがたい魅力を秘めた国である。

2005年度の海外研修国はこのタイ王国。皆さんをどこにご案内することにしようか。王族が学ぶこととアカデミズムの高さで誉れ高いバンコクのチュラロンコン大学の教員たちとの懇談、小・中学校の英語の授業参観、ユネスコの世界遺産のひとつ、アユタヤの遺跡めぐりとバンパイン宮殿見学、歩き疲れたら、タイ古式マッサージも欠かせない。バンコクから飛行機で約1時間、1000m級の山々に囲まれた高原に存在する都市、チェンマイでは、バンコクが失ってしまった澄んだ空気と伝統を育む静けさを満喫しよう。チェンマイ大学を訪問したら、山岳民族に会いに行こうか...そうだ、甘く、辛く、すっぱくて刺激的なタイ料理と優雅なタイ舞踊も忘れてはならない。しかし、日本人と同じEILの環境にあるタイ国民との英語による伝え合いを、何よりも第一に体感していただきたいと願う。

ミンダナオ訪問

浅川和也(東海学園大学)



ここ5年、フィリピンに、英語教師のみなさんと出かけている。いつも10名以下の小規模なツアーだ。昨年の夏は、例

年のコーディネータと2人で、事前調査のつもりでミンダナオに行ってみることにした。ミンダナオ島は、マニラからさらに2時間南にある。マニラは、台風が心配だが、ミンダナオには、台風はこない。スペイン統治時代からの、大プランテーションがあるところだ。また、戦前・戦中は、麻の生産に、日本人が入植していた。フィリピンの最も暑い時期は、4月、5月なので、この時期はすごしやすい。西部は、イスラム教徒が多い地域である。日曜学校にあたるマドラサーでイスラムについてやアラビア語を学ぶ。マニラよりもマレーシアや中東に出稼ぎに、出かけることが多いという。

これまでの縁のあった団体や関係者から、CRS(カトリック・リリーフ・サービス)というキリスト教の団

体を紹介され、教育活動の現場を訪問することができた。

ミンダナオは、1970年代から、ずっと戦火がたえない。自治独立を求めるイスラム勢力と政府軍の武力抗争は、宗教戦争であるかのように報じられているが、現実には、利権争いである。2000年、02、03年と、大規模な紛争があり、そのたびに数ヶ月、何万人もの人びとが、避難生活をしいられている。武力による被害よりも、避難生活によって、病に倒れる場合の方が、おおいのだという。

物資を運ぶ手伝いをしていたら、それが武装グループのものであって、いつの間にか、ゲリラになっていた、殺された親の復しゅうのためにゲリラになった、などのことは現在の話だ。ひとびとのなかに生まれた、憎悪、偏見を取り除くのは、大変なことだ。きわめてささいな、抗争から、武装闘争に発展することもまれではない。この司祭が、クリスチャンとイスラムの相互理解こそが大切だと、イスラム教徒の多いこの地域を駆けまわり、この地域は2003年の紛争時には、かつてのような、戦火をまぬがれている。相対するのは、敵ではなく、戦争こそが、敵なのだと説く。窃盗などの犯罪をどうさばるか、捕まえて、処罰するのみでは、事は、おさまらない。地域や関係者総出で、損害をもとに戻し、人間関係を回復するのだ。警察・司法ともに人びとの努力がある。

ミンダナオ島の西南部の都市・コタバト市(ピキットから約2時間)にも行った。コタバト市および周辺の州は、イスラム自治区ということになっている。イスラムとクリスチャンが、ともに学ぶ幼稚園も見学した。イスラムとクリスチャンの高校生のサマーキャンプも行われている。戦火で親をなくしたストリートキッズのシェルターで、高校生らが、ボランティアをしている施設で、話しあう機会もあった。

フィリピンとのかかわりにおいて、どうしてもマニラ中心の交流になりがちだが、フィリピンは多様であるということもミンダナオでさらに感じた。



新 刊 紹 介



『多言語社会がやってきた： 世界の言語政策 Q&A』

河原俊昭・山本忠行編
(2004年, くろしお出版)
ISBN 4-87424-307-X
価格 2,200 円 + 税

紹介者：吉川 寛(中京大学)

本学会員の河原俊昭氏, 田嶋ティナ宏子氏, 後藤田遊子氏, 榎木蘭鉄也氏, 樋口謙一郎氏等, 編・著者総勢 22 名による『多言語社会がやってきた』が 6 月にくろしお出版から刊行された。「日本編」, 「世界編」, 「理論・一般編」の 3 部からなり, Q&A 形式で 1 項目 2 頁, 107 項目を収録している。44 項目の「日本編」は「日本語問題」と「国内の外国語問題など」に, 同じく 44 項目の「世界編」は「欧米」と「アジア・アフリカ。オセアニア」に夫々下位区分されている。「理論・一般編」は 18 項目となっている。

編著者の河原氏も「はじめに」で「座標軸は『いま』『ここ』にある」と述べているように, まさに現代の言語問題に焦点が当たっている。日本に『多言語社会がやってきた』ことによって様々な問題が起こることが想定される。多言語社会に慣れていない日本人が多言語化にどのように対応していいのか暗中模索が現状である。この書は, 同化主義より多言語, 多文化相対主義の立場を基盤とし, そこからの視座で対応を示唆しているように思われる。日本の先輩である「世界編」各国の事例が良き参考となるように考えられている。

各項目はよく吟味され, 想定されるほとんどの問題に分かり易く回答を与えている。「日本語教師, 国際ボランティア」を目指す人達の書と帯にあるが, 全人向けの格好のハンドブックとなっている。



『世界は英語をどう使っているか <日本人の英語>を 考えるために』

竹下裕子・石川卓編著
(2004年, 新曜社)
ISBN 4-78850906-7
価格 2,200 円 + 税

紹介者：相川真佐夫(京都外国語短期大学)

本書は東洋英和女学院大学の教授陣 13 名に本学会メンバーの本名信行氏, 奥平章子氏が加わり, 各人研究を重ねてきた専門領域から「英語」に切り込むという手法で各章・各節が成り立っている。これまで, 「英語」というものは言語科学や文学のアプローチによって概説されるのが定番であったが, 本書は「英語」の社会的普及や接触といった社会学的な観点から踏み込んでいる点で斬新である。

本書は大きく 2 部に分かれている。第 1 部は「世界のさまざまな英語」と題し, 現代的視点による「英語」総論と, アセアンと中東社会の「英語観」, 国連と英語との関係を概観し, さらに, Inner Circle であるアメリカ, カナダ, オーストラリアの英語を例示している。また, 国際的視点から見た現象だけに止めるのではなく, イギリス文学や聖書に見る歴史的視点からもさまざまな英語を扱っている。

第 2 部「私たちの英語」では, 読者と英語との関わりを中心に, IT, ジャーナリズム, 福祉, 幼児教育などを通して身近に接触する英語を取り上げながら, 日本人として現代英語とどのようにつきあっていくべきか, 異文化との接点で, 英語が日本人の可能性をどのくらい広げてくれるかを読者に教授・提案している。

全てを読み終えた後で「あとがき」に目を向けると, 東洋英和女学院での輪講形式による総合講座『World of English』の内容をまとめたものであるということがわかった。英語を勉強する学生は, 英語の持つ科学的側面ばかりでなく, 本書の提示するような社会学的側面を吟味することによって, 現代社会に必要な「英語観」というものをどこかで身に付けなければならないものである。そして, 「英語が使える日本人」とはどのような人かを立ち止まって考えるべきであろう。これは学生だけでなく, 教員にも向けられるべき課題である。日本「アジア英語」学会のメンバーは, おそらくそのような教育をデザインし, 先導する立場にあると思う。本書は, そのフレームワークを我々に提示しているかのように感じる。

最後に, 研究領域を異とする教授陣の様々な点が, 竹下・石川両氏のイニシアティブにより, 「世界の英語」というテーマの下に 1 本の線で繋がったことに拍手を送りたい。

新 刊 案 内

『ことばとアイデンティティ：ことばの選択と
使用を通して見る現代人の自分探し』

小野原信善・大原始子編著 三元社

価格：2300円+税 ISBN 4-88303-145-4

多文化・多言語社会において、人々はどのようにして、「ことば」を選択し、使用しているのか。それは、人々にとってなにを意味するのか。フィリピン、インド、シンガポール、アメリカ、ニュージーランド、日本を例に、「ことば」の選択による、さまざまなアイデンティティ表出のあり様から、現代人の「自分探し」を読み解く。
http://www.sangensha.co.jp

『自治体の言語サービス：

多言語社会への扉をひらく』

河原俊昭編著 春風社

価格：2400円(税込) ISBN 4-86110-022-4

「在日外国人は困っている！」急病のとき、火事のとき、ゴミの出し方、子どもの教育、住宅問題、年金制度... 各自治体はこんなふうに取り組んでいる。

神奈川県、東京都、相模原市、東久留米市、川崎市、豊田市、浜松市、沖縄県、旭川市、ユジノサハリンスク市、秋田県、山形市、小松市、金沢市、久喜市、神戸市の場合。

自治体の言語サービス(情報提供、相談活動、通訳・翻訳、母語支援)の現状と問題点を具体的な事例にもとづき紹介し、改善策を提示する。

「言語政策分科会誕生！」

昨年の11月20日に言語政策分科会の第一回の会合が渋谷の喫茶店で開かれました。コーヒーを飲みながら、10名が「アジア英語、言語政策、国際英語、言語サービス」などをキーワードにしてかなり格調の高い議論をしました。格調高い話なのですが、和気藹々の楽しい雰囲気のもとで行うことができました。今後も定期的に会合をもち、メーリングリストを開設することになりました。その成果はいつかシンポジウム、モノグラフ、出版という形で皆様にご披露したいと思います。

誕生したばかりの分科会ですが、皆様、よろしく願います。(文責：河原俊昭)

ニューズレター編集委員より

今回のJAF AEニューズレター17号は、7月発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。

自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。毎号、3件以上を目標に集めたいと思います。ご協力お願い致します。

書いてみようというご意志がありましたら、5月下旬までに編集担当(相川, aikawa@nnc.or.jp)までお知らせください。

事務局からのお知らせ

2004年度研究助成金採択者

アジア英語に関する研究を振興・奨励するために、会員を対象とした研究助成プログラムを始めました。本年度の採択者は梨本篤司(青山学院大学ALMプロジェクト補助研究員)と三宅ひろ子(青山学院大学大学院博士課程)の2氏(受付番号順)に決定いたしました。

研究助成金の審査は、5名の審査委員によって、定められた基準に従って付けた得点を合計することにより、厳正かつ客観的に行なわれました。審査の公正さと客観性を確保するため、応募者の氏名と所属は匿名で、審査がおこなわれました。審査委員長を含めて審査委員が応募者の氏名を知ったのは、最終結果が確定した後であったことを付言いたします。

2005年度研究助成プログラム

アジア英語に関する研究を振興・奨励するために、会員に対する研究助成を2005年度も引き続いておこないます。申請期間は、2005年1月1日(土)から1月31日(月)(消印有効)です。申請書及びプログラム規程は、学会のURLからダウンロードして下さい。
http://www1.linkclub.or.jp/~jafae/grantpage.htm

申請用紙の記入や応募方法でご不明の点があれば、事務局の榎木蘭までお問い合わせください(enokizono@akita-pu.ac.jp)。なお、審査は5名の審査委員による匿名審査でおこなわれます。

第17回全国大会について

第17回全国大会は2005年6月25日(土)に兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス(神戸市)にて開催致します。大会実行委員長は末延岑生理事です。

第17回全国大会研究発表者募集

第17回全国大会(2005年6月25日(土)、兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス)で研究発表を希望される方は、要旨(日・英どちらか)をWORDで1枚にまとめ、4月28日(木)までに大会担当理事の榎木蘭まで電子メールにてお送りください(enokizono@akita-pu.ac.jp)。

CALL FOR PAPERS for the 17th National Conference on June 25th, 2005 at the University of Hyogo in Kobe University Park Town.

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail. Please write a 1-page abstract with MS WORD and email it to Professor Enokizono at [enokizono@akita-pu.ac.jp]. The deadline is Thursday, April 28th, 2005.

海外研修旅行について

次の海外研修旅行は、9月頃にタイへ行くことが決定しております。現在、日程や訪問先などの詳細を検討中です。詳しくは後ほどお知らせいたします。

国際会議情報（アジア周辺）

2005 Ming Chuan University conference, "Language Policy & Issues in EFL, ESP and Applied Linguistics,"

Date: March 11-12, 2005

Venue: Ming Chuan University, Taiwan

<http://www.tj.mcu.edu.tw/english/index.htm>

CamTESOL Conference on English Language Teaching

Date: March 11-12, 2005

Venue: Phnom Penh, Cambodia

<http://www.camtesol.org/>

Southeast Asian Ministers of Education Organization (SEAMEO) Regional Language Centre (RELC) 40th International Seminar "New Dimensions in the Teaching of Oral Communication," SEAMEO Regional Language Centre, Singapore

Date: April 18-20, 2005

<http://www.relc.org.sg/>

Seminar Secretariat: admin@relc.org.sg

Asian EFL Journal conference "The Future of English Education: Making Connections"

Date: May 13-15, 2005

Venue: Dongseo University Pusan, South Korea

http://www.asian-efl-journal.com/conf_ant_editorial.html

Malaysian English Language Teaching Association 8th Biennial International Conference, "English Language Education: Confronting Changing Realities,"

Date: May 30-June 1, 2005

Venue: Sheraton Subang Hotel & Towers, Selangor, Malaysia

<http://www.melta.org.my/modules/news/>

以上の情報は TESOL の website から転載しています。

http://www.tesol.org/s_tesol/index.asp

ASIALEX 2005 Singapore, "Words in Asian Cultural Contexts"

Date: June 1-3, 2005

Venue: The M Hotel, Singapore

<http://asialex.nus.edu.sg>

International Conference on Cross-Cultural Communication, "Modernization, Globalization and Cross-Cultural Communication"

Dates: July 6-8, 2005

Venue: Chinese Culture University, Taipei, Taiwan

Web: <http://www.trinity.edu/org/ics/>

The deadline for the Abstract (about 150-250 words, English or Chinese) of your proposed paper and panel proposal is February 1, 2005. All submissions will be carefully reviewed. Please EMAIL your submission to:

Dr. Guo-Ming Chen

University of Rhode Island

Department of Communication Studies

Kingston, RI 02881, USA

Email: gmchen@uri.edu

2005年1月15日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number: 00280-8-3239